

# 貞丈雜記

八之下

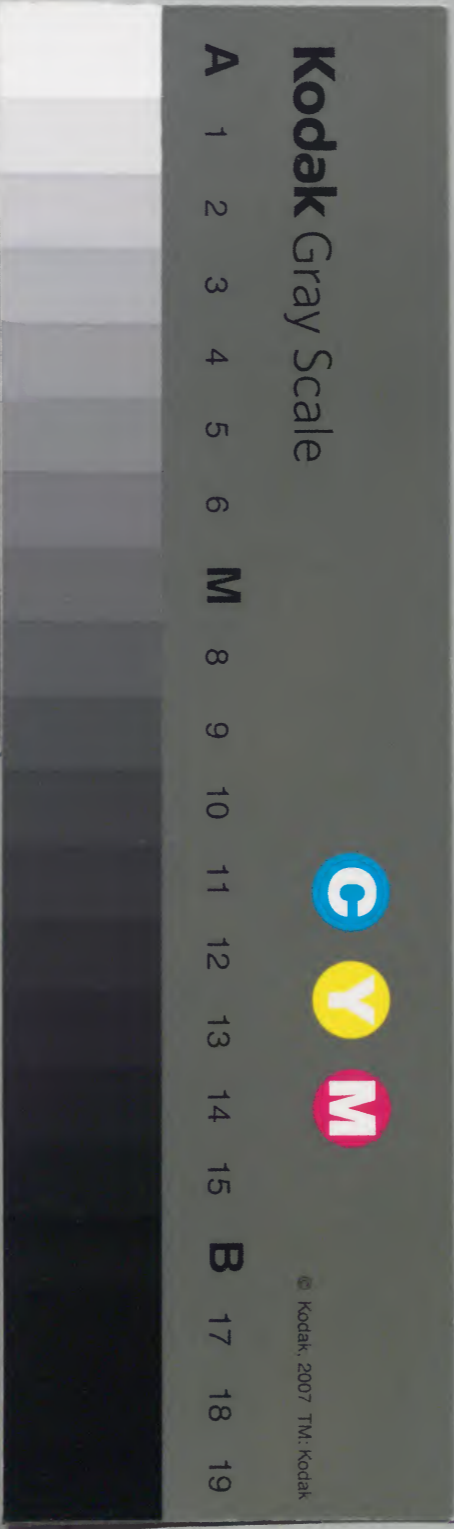
五五〇〇番

和 第 共			
庫	文	閣	内
一五三函架	三四二冊	一四二號	和書類

和 書 門			
太 政 官 文 庫			
三三冊	一三八冊	二四二冊	一四二冊

禮

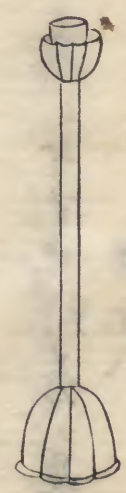
内閣文庫	
番號	和 11422
冊數	32 ( 16 )
函號	153 287





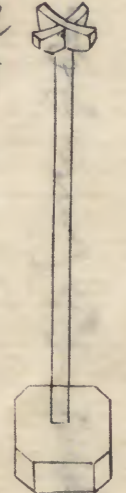






菊燈臺

上下とも菊の花の形



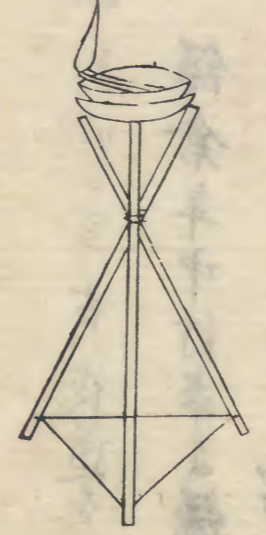
切燈臺

白木にて上ハハカク下ハ四方のめんをとりて度所法を以て見

短檠と云ハ燈臺の短きを云ハ長きをハ長檠と云惣名をハ檠  
檠と云燈臺のより

むまび燈臺のよりハ禁中にて公事公事とは争論のよりハ非也  
まうまうを以て公事と云

を行る可し其用の度の前よりツカサ燈臺之細く丸く削り  
たる木を立鼓のリウゴめくまてツカサけを置いて油を入れ火を  
ともまて給馬丸のめ



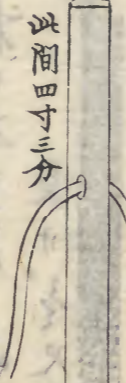
結燈臺寸法柱の長サ二尺五寸五分ハ口  
丸ノ徑上ニテ四分下ニテ六分 又ハ上ニテ四  
分半下ニテ六分半ニモスル也 是ノ間一尺  
八寸程マ也

元文大嘗會繪卷  
物ニ足ノ張り繩  
ナシナキヲ本ト  
スベシ張繩ナク  
テモ倒レルヲハナ  
キ也

柱三本柳枝白木

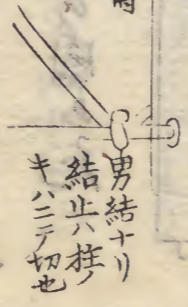
麻繩太サ三ツヅリ是程也

池ノ六分



此間四寸五分

此繩二重廻シ結也三本ノ柱ヲユルク結置テ立ル時  
右ノダリニ順ニ子ヤルナリ



男結ナリ  
結共六柱  
キハ三ツ切也

一 脂燭の事は座敷の上にてとがすたるなり也これをお

めいとも云也松明と書也婚禮ムカハありし時女房トノモ杭を

さして迎ムカハふ出のり此脂燭を用ひ禁裏トノモ天子夜の出御

は左より右へ右より左へ志をさすなり此右より

立つ人の志をさすなり此右より左へ志をさすなり

長サ一尺五寸程切りてさすは御り三斗サハなり

あつをいふす  
つらつらとす  
くさくさといふ  
若聞集も脂を  
さして送りたり  
軍防令も義解ニ松  
明ハ松ノ脂有ル者也  
ト見ル是松ノヒト  
云物也ヨク火ヲ元ナリ



紙を紙に折を川  
 へてスキ出ス紙也又  
 キ返シ紙也色ウス  
 黒シ今ハ無之故折  
 原ラウス黒ラシテ用  
 エ能也

削て先の方を炭火にてあぶりて焦く焦す也焼て炭火にて焦く焦す也  
 焦す油を引てあぶりて焦く焦す也  
 紙の字、あぶりて焦く焦す也  
 元文の天子攝町院の大嘗會を行ひのひ一、時用て紙、脂燭  
 を或人武志小治殿へあぶりて焦く焦す也  
 松の木を用てあぶりて焦く焦す也  
 又本を紙にてあぶりて焦く焦す也  
 紙の字、あぶりて焦く焦す也  
 元文の天子攝町院の大嘗會を行ひのひ一、時用て紙、脂燭  
 を或人武志小治殿へあぶりて焦く焦す也  
 松の木を用てあぶりて焦く焦す也  
 又本を紙にてあぶりて焦く焦す也  
 紙の字、あぶりて焦く焦す也

徑三分程  
 先ヲ平切ル  
 本ノ方ヨリ  
 ナホッキ心ニ

「先を二寸程あぶりて焦く焦す  
 油をぬりて又あぶりて焦く焦す  
 紙のヒゲを用てあぶりて焦く焦す也」

「紙を紙に折一、  
 十斗を焦く焦す也」

「紙を紙に折一、  
 十斗を焦く焦す也」

長サ、尺五寸、ホド丸シ

一 掌燈と云事、禁中にて節會此、時主角寮の官人片手に  
 脂燭を持片、手小きわらうてあぶりて焦く焦す也  
 猪鬃を受けて持あぶりて焦く焦す也  
 右の土器の中、代りの脂燭をも入置也  
 火の下へあぶりて焦く焦す也  
 一 蠟燭の事、源順の和名抄燈火部曰蠟燭唐式云少府監毎年  
 供蠟燭七十挺、下見タリ  
 職負令主殿寮ノ令ニ云頭一人  
 掌供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐洒掃殿庭及燈燭松柴燎

○義解ニ云謂油火為燈、蠟火為燭也  
 令、大正年中、令ヲ







筋筋  
文字不同  
ラフシキ故記

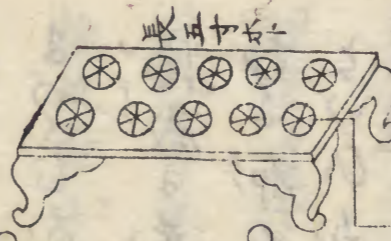
○火筋

○香筋

○銀八廿三

○火アジ

○銀臺



札筒

青貝也是ニ銀葉ノ  
ヤケタルヲ置ナリ

形サマク也銀  
ヲウスクホク  
タル也ヘリアリ  
或ハ雲母ヲハ  
キテ銀ノフチ  
ヲ付タルモアリ  
銀盤ト云非也

○香札 唐木也長八分  
一ヨリ十迄文字  
ヲカク也

○同 客ノ字ノ畧  
ウツカク也

○繪ヤク者  
ヲカク也

○ウ  
蓋アケ也

銀はなみもあし十種香も昔より有

し故香札も札筒もあしなれども今

の如く結構よりし是迄もよ何んぞ

當世くようとくも也やれども

いしはるもあまのうらあり

が次第くはるあわくもあつ成る

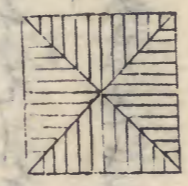
してあつ古今終りあり

一香炉の灰四合五合六合あつて云ハ

科目の事よていあし灰のあつたの

事也四方より灰をいしは四合と

四合



五合



六合



香舎之事  
香ツミ子  
香合ミ事  
空焼ミ事  
右、雜部ニ記ス  
見合スベシ  
香ヲカグト云フ  
言語ノ部ニ也ス

一四方より灰をいしは四合

五合と云ハ五方よりおたる

一香爐の灰をおさる見方のうらうらさるはあつて銀盤の

事えより香もあつたる灰をおさるは灰のあつて之を

阿けがうし灰をおせし香のいしはるを云上りよす

いしは灰をおすも火ぞくもを付するは灰あつての道具

ハ後よ作ら出たる物とぞ香炉の灰おけ表ハひりき形長

ハ扇形秋ハひり形冬ハおさるして灰をうき上げおくと云

ありは事香の家ハあさる也志野三郎左衛門宗信ウあつて

たる香の云ハ 宗信ハ東山殿時代の人也志野流の  
元祖也香の書ハ文龜元年の書あり 八卦香炉云

雜記ハ

世三



香匙ハ香をまく  
ハ火をく火の助  
ハ火をく火の助  
ハ火をく火の助  
ハ火をく火の助  
ハ火をく火の助  
ハ火をく火の助  
ハ火をく火の助  
ハ火をく火の助  
ハ火をく火の助

八卦香炉とハ八角ありてハ  
卦の形を付する香炉あり  
香すく時ハ四季の卦を面する  
やうふて其心得ハ炭瓶の箸  
盆の内墨合同糸く成る此を  
すそをちひ四季の灰ありやうある  
いふやうにさるる云々

一 香助ハ上古ハあり  
上古ハ蕙物を用ひ  
故香匙を用ひ  
香匙ハたき物を  
後醍醐院の江村系極佐渡入道道譽と云  
人  
沈一をを林ハく半を好す  
一をを好す  
沈ハ沈香  
沈ハ香匙  
沈ハ香匙  
沈ハ香匙  
沈ハ香匙  
沈ハ香匙  
沈ハ香匙  
沈ハ香匙  
沈ハ香匙  
沈ハ香匙

の心ハ木目の木ハ通る  
木ハ通る  
木ハ通る  
木ハ通る  
木ハ通る  
木ハ通る  
木ハ通る  
木ハ通る  
木ハ通る  
木ハ通る

一 沈ハ木の品六種あり  
真南蛮ハ佐尊羅ハ羅國ハ寸門陀羅是也  
一名香ハ六十一種あり  
此六十一種と云ハ右小記す  
六種ハ名を付する  
法隆寺ハ佐尊羅也  
三芳野ハ羅也  
紅塵ハ羅也  
古木ハ羅也  
蘭奢待ハ一名東大寺ト  
園城寺  
富士煙ハ新加也  
葛

一 沈ハ木の品六種あり  
真南蛮ハ佐尊羅ハ羅國ハ寸門陀羅是也  
一名香ハ六十一種あり  
此六十一種と云ハ右小記す  
六種ハ名を付する  
法隆寺ハ佐尊羅也  
三芳野ハ羅也  
紅塵ハ羅也  
古木ハ羅也  
蘭奢待ハ一名東大寺ト  
園城寺  
富士煙ハ新加也  
葛

一 沈ハ木の品六種あり  
真南蛮ハ佐尊羅ハ羅國ハ寸門陀羅是也  
一名香ハ六十一種あり  
此六十一種と云ハ右小記す  
六種ハ名を付する  
法隆寺ハ佐尊羅也  
三芳野ハ羅也  
紅塵ハ羅也  
古木ハ羅也  
蘭奢待ハ一名東大寺ト  
園城寺  
富士煙ハ新加也  
葛

一 沈ハ木の品六種あり  
真南蛮ハ佐尊羅ハ羅國ハ寸門陀羅是也  
一名香ハ六十一種あり  
此六十一種と云ハ右小記す  
六種ハ名を付する  
法隆寺ハ佐尊羅也  
三芳野ハ羅也  
紅塵ハ羅也  
古木ハ羅也  
蘭奢待ハ一名東大寺ト  
園城寺  
富士煙ハ新加也  
葛



○青梅アヲメ如羅  
 ○飛梅トビウメ  
 ○種嶋タケガシマ  
 ○濔標シラツクシ  
 ○月ツキ如羅  
 ○龍田タツタ如羅  
 ○紅葉モミヂ  
 ○斜月シヤゲツ  
 ○白梅ハクバイ真南  
 ○千鳥チドリ如羅  
 ○添花ホツケ如羅  
 ○老梅ラウバイ如羅  
 ○八重垣ヤチヘ如羅  
 ○花宴ハナノユキ如羅  
 ○花雪ハナユキ  
 ○明月メイゲツ  
 ○賀ガ  
 ○蘭子ランコ  
 ○卓タク  
 ○橘キハチ  
 ○丹霞ニシキ如羅  
 ○花形見ハナカタミ新加  
 ○明石アカシ真南  
 ○須磨スマ真南  
 ○上薰ウヘカキ  
 ○十五夜ニウゴヤ  
 ○隣家リンカ如羅  
 ○夕時雨ユフシグレ真南  
 ○手枕テマクら  
 ○晨明アサノアカ真南  
 ○雲井クモイ真南  
 ○紅ベニ如羅  
 ○泊瀬ハツセ新加  
 ○寒梅カシバ真南  
 ○二葉フタバ如羅  
 ○早梅サウバイ  
 ○霜夜シモヨ  
 ○寐覺シザル真南  
 ○七夕タタタ真南  
 ○篠目シノメ如羅  
 ○薄紅ウスベニ如羅  
 ○薄雲ウスクモ如羅  
 ○上馬ノボリウマ如羅  
 以上五十種  
 十一種  
 都合六十二種  
 之名香ハ慈昭院殿東山義政公 逍遙院殿三條西内大臣實隆公 志野三郎左衛門尉  
 信此三人談合有々天下の名香ハ三十一種ヲ定メ處ルル云々

一 沈シヅと云ハ今此ココ如羅ニヤラの事之能き木の水ヲ入色バ沈む也之が香  
 と書ク沈香シヅカと云ハ今此ココより渡来する壺ウツ子コを以て木を以て  
 して渡来する今此ココ沈と如羅ニヤラと云ハ少遠シウエン之也今此ココ沈と  
 云ハ今此ココ占城チヤンシと云國クニより出也沈香シヅカハ陰木也如羅ニヤラハ陽木也  
 今此ココ用多子沈香シヅカ氣キを以て物モノ也如羅ニヤラハ氣キを以て物モノ也物モノ之性セイの  
 遠トウハ今此ココ知チ之也

一 沈シヅの初ハジメと云ハ沈シヅのシヅを以て今此ココたとふ物也  
 一 沈シヅ乃箱ハコと云ハ沈香シヅカを入箱ハコ之ニ重オモシくして上ウエの香カハ沈シヅを入色  
 下シモの香カハ沈シヅを挽切ヒキキ鋸ノコギリカキ提チ也今此ココ重也箱ハコハ梨子リシ地チ蔀シロ  
 修シユ堆ツエ朱シュ書シヤ具キ沈シヅ金キンあり小コ箱ハコあり不定フヂョウ

此の草紙云々の  
 沈香シヅカと云ハ今此ココの  
 沈香シヅカの香カハ沈シヅを以て  
 沈香シヅカの香カハ沈シヅを以て  
 沈香シヅカの香カハ沈シヅを以て







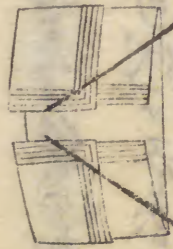
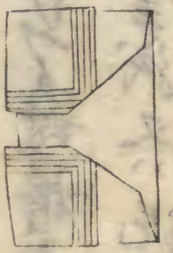
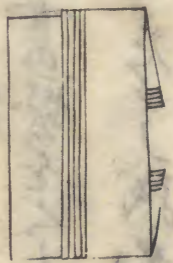




ハ糸の  
職人也 正折極め丸  
と云又と云ひ 第と云ひあり

は通りを折る  
上の圖の如く  
あり

○まろひの紙



一 志やうすりと云拍婚入道具の記より麝香シヤカウをまろひの紙  
小き茶碗の縁を包むより梅もやまおへ何れも唐物之麝香  
いけ志やう水あづまひも也志やの志やうより外は焼拍の茶  
のまろひの内は志やまろひは焼拍も也

一 小見逆生の時犬箱を作りて小児のまろひをおく幸犬まろひ  
犬の性シヤカウのまろひを魔障を退る物之依之犬の形を作りて  
置也禁裏シヤカウに紫震シヤカウ殿清涼殿と云所敷の帳シヤカウ臺の中よ

禁中元日の御舎  
侍所位などの時  
犬のまろひは年  
人の官人犬のまろひ  
をよて君をまろひ  
まろひは喜ぶまろひ

栄花極日  
のまろひは  
のまろひは  
のまろひは  
のまろひは

こ満犬の縁番文  
安伊即位は御  
の圖はアリ見て  
考へ  
拍犬ハ兎ト云獸  
也トゾ一節アリ

拍犬キチヤウを作り並る又几帳キチヤウの傍にも拍犬をた置キチヤウ几帳の如く  
むろを風ふりまろひをまろひのまろひも用也栄花極日几  
帳の中よりこのぬの目打光と云ものあり又源氏物語枕草子  
有天子御即位の時侍所位と天子のシヤカウ兼明門と云所門の左右アカハの  
拍犬を置也是皆惡魔を退るの意と云也其用ハ門  
の扉を風ふりまろひをまろひのまろひも用也拍犬といふ唐犬  
の形カラのまろひも尾シヤカウの唐獅子の如くまろひの形カラも  
も拍犬を並る也こ拍犬といふ子をあや犬と  
光シヤカウのまろひも拍犬といふ唐獅子の如くまろひの形カラも  
小見のまろひも拍犬の心あり小見のまろひも拍犬の心あり  
まろひのまろひも拍犬の心ありまろひのまろひも拍犬の心あり

一 掃巾クシケンと云織物オリモノも縁也泔シヤカウ杯シヤカウ歩シヤカウ乱箱シヤカウの下シヤカウも也將軍元



服記より何の櫛巾の圖

將軍御元服記云後櫛巾長六尺横三尺六寸西面  
絲織色黄也御紋菱裏板引フシカ子深也

此圖類  
聚雜要  
抄ニ見エ  
タリ

櫛巾長八尺弘廿二幅固文綾下深裏  
濃打物凡櫛管具也櫛管用時用之  
加冠用時十疊天打亂管蓋置之

如此四方ニ五色  
ノ糸ニテ上サシ  
アリ此事雜要  
抄ニ見エズ  
書落シ十九ヘシ

髪カミの具を多しを櫛巾の上にあくく下はあくお櫛巾ハ  
たゞそてお乱箱ランコウは納之右附ウチツケ杯尻ハシ境サカイ同着櫛巾ホの寸尺  
將軍御元服記より遠よりケ指ササのおも時代よりより家々の  
侍サマ來るものより一定の法ホウあり其大概オホトモを記す其後其他

ク

一 水引ミツヒキ紙カミ拾ヒラキは粉水コノミヅを引る也水引の紙拾は粉水を水

引と云也色ハ白一進物イマモノあり結ムスビハ漆シヤクを多用

一 薬器ヤツキといふハ唐土カラツチより名ナをりを入イレる器ウツバ也漆シヤクハのめりしそめり

あり堆朱ツイシユありしそめり物モノ之ノ櫛ハシり葉ハを入イレる成ナリへ又帰花カハナの葉ハ器ウツバと

云ハボウ此コノをシ形カタをシ付ツケる云花ハナびうヒウのそり返マゼる形カタは帰花カハナと云

一 盆香ボンカウ盒コウ印籠インラウ葉ハ葉ハ器ウツバありの堆朱ツイシユは色イロをシ換カへり堆ツイハハシらう

とつとよむ字ジを朱漆シヤクをあつツくぬりて給タマ物をうづツるなり

あげアゲる也別紅テラコといふはやのふ水ミヅ雲クモ菱輪シヤク遠トホありなり上

は人形ニギキョウ座ザ花ハナ多タあり何ナニの色イロあり○堆紅ツイコウハ色イロ赤アカなりなり

あつツくツなりしちりめふ馬ウマき筋スジあり○金糸カネシハ色イロ赤アカなり

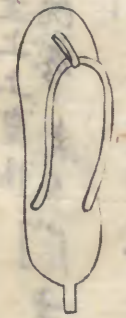
ゆふ色ユフイロと雲クモ筋スジの筋スジありなりなりなりなり又馬ウマき



グ  
曲々ノ事當時ハ  
グリトバカリ云  
ハ俗語ナルベシ  
香盒或ハ根付十  
ドニ多クアル也

カ何の上もけりめも悪く悪念糸と云○紅花緑葉ハ花糸を赤  
く枝糸を赤くぬりたる也○桂漿ハ糸馬ノ何りめ赤糸を糸  
の筋何り又ニ糸も有又地を赤くぬりたるも有り地紅の桂  
漿と云也地ハ黄漆也○犀皮ハ糸馬ノ何りめ廣く淺く  
赤き色ハ何り色の極小ハ何り也堆鳥ハ桂漿の糸をくも  
とハ◎◎◎地ハ黄漆也○堆漆ハついで  
堆紅のぐりくも有也○堆漆ハついで朱  
常ノ日本も有○玳瑁蔀繪也○玳瑁ノ文ノ如くもトリタルナリ  
物也并ナドニスルナリ 右東山教法ハ厳記ノ見えたり  
緒太と云ハ蘭の糸履也此れめくの紙緒のさうもの緒を太  
くして也此中の糸を三寸廻り細くも有也式正の装束  
美しき糸をくも有也緒太をのげとも有也  
毛蘭履と云ハ女の糸履ハ緒細き也  
げと云ハ草履の糸履也  
あんどうと云ハ草履の糸履也  
一 女ハあげをくも有也緒太をくも男も有也  
一 志手れハ尻切と書く草履ハ何りも有也道の志あり  
時よく物也今の世ハ雪踏と云物ハ志手れをくも物也  
雪踏ハ千利休の志出ハ何りも有也近代の物也志手れハ昔より  
あり也志手れの形也

くして也此中の糸を三寸廻り細くも有也式正の装束  
美しき糸をくも有也緒太をのげとも有也  
毛蘭履と云ハ女の糸履ハ緒細き也  
げと云ハ草履の糸履也  
あんどうと云ハ草履の糸履也  
一 女ハあげをくも有也緒太をくも男も有也  
一 志手れハ尻切と書く草履ハ何りも有也道の志あり  
時よく物也今の世ハ雪踏と云物ハ志手れをくも物也  
雪踏ハ千利休の志出ハ何りも有也近代の物也志手れハ昔より  
あり也志手れの形也





一 檳榔の裏無のる太平記卷九 主上上皇法 沈落、系、門主ハ長くと 漆垂

檳榔毛ノ車毛蒲  
葵ノ葉三三ノ背  
也

御即位時綾  
蘭笠モビレウニ  
テフクナリ

〇うらちの鳥  
緒太とも云  
おとろを  
まじりハ  
やバのり  
あまや鼻  
備め也



蘭を制作する  
をあらんと  
し

長宿の衣ハ檳榔の裏無を被る云々 有今今あき作あり

檳榔ハ蒲葵と云木のもの 上古ビリヤウト云文字知リシユハ 檳榔ト云字ヲ 倣り用ヒタル也本字ハ

蒲葵ト書也檳榔ハ別 木の形も葉も檳榔の如く葉ハ志あり

よりも長く白く枯せハ管ハ似たり 葉も作りしより子履を

檳榔の裏無と云々 徳太とも云野官宰

相定基根ノ云徳太是俗名ハ上古ハ裏無を祿ハ檳榔を用事

観應二年四月四日の園大曆ニ不見ハ今ハ檳心草を編て作り云

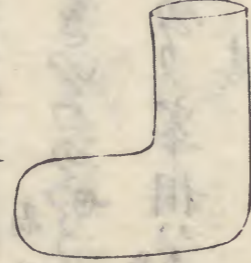
鴨沓のる公方様は成次牙沓 馬上沓 をめさせ可やろのたよりめ

させ中但鴨沓あつハ右よりめさせ中とあり鴨沓と云ハ靴

あとの時にも用ゆる物也其形は是ごとく沓の鼻先を丸く

作たる物あり馬上沓あどの如く鼻先をつまむ花の圖の如

鴨沓  
之圖



親長卿記云明應五年二月廿一日親王所方所鞠  
張行親王所方萌黄陸水干以葛袴今若鴨沓

給云貞知天正記云鴨沓のるをハ右よりめさせ中馬の沓を

ハ左よりめさせ中云々 き馬の沓ハ馬上沓の事也

一 沓の切 沓の切 ハ沓をとる小刀也沓ハ沓めと云る 五音也二本

一 射の物之双の糸也サ三寸五分斗也柄鞘あり唐木又ハ漆

ぬり舟繪木も有之寸法木定あり二本の内一本ハ沓の如

右双の沓 ヒタリハ 是右の沓を取之 一本ハ沓の沓を取之

堀川百首惟明  
親王 この地は  
ありあり鴨沓之  
つのかささうめ  
沓のまじりある  
らん















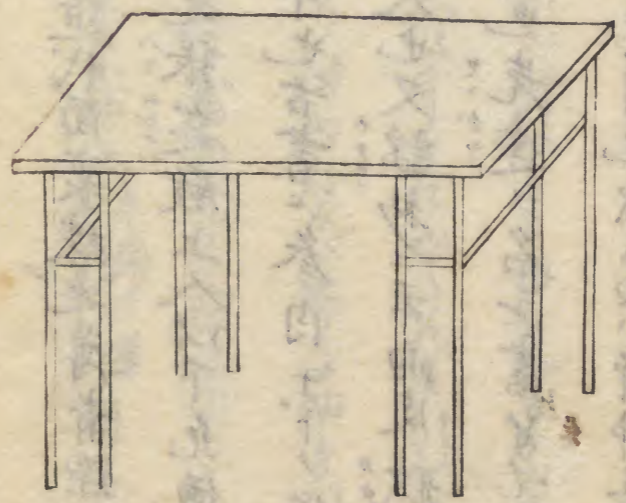


一八足の事年中恒例記六月晦日水無月後の条云齋藤将監仍  
庭上祗候以て八足并湯桶ヲツカヒヤ也云々八足と云云ハ  
ハッ足を付く案也八脚の案ト云物也禁裏より内神事の時  
并へ供へる物非酒之外盛り物を載つゝ元也形丸の馬  
乃如

八脚の案

白木也

元文大嘗會ノ  
記ニ見タリ



一覽箱と云物ハ宜旨を入る文箱也源平盛衰記卷三十三頼朝征  
夷將軍

宜旨 庚定閑 ヲツラ ヲバコ  
東下向之糸 云累葛箱ヲ奉入處の宜旨袋を傳取存んて左衣の

巾をさくぐる 中畧 覽箱の蓋は砂金十兩入てきス云々按る不覽箱

ヲツラ 累葛を以て作りしる箱ありし右の巾衣は累の字サ冠ありき也

傳言の誤歟

一燒石と云今此温石の事也源平盛衰記卷四十五二位祿元女院ハ

後れまじしと云燒石と云硯の箱とを左右の巾衣子宿ノ巾衣

を穿つてしつゞきそ海に入つせ給ひん云々 温石といふ物唐の眞の  
温石ハ自始と温ある物

也と云その物云々故  
云々の石を燒て用たり

一物の袋あどの端燈の小子の端あど云々魚を載るるなり











押切テ北ノ方ノ文一  
美ノ引返シ云々

一 道具と云詞ハ其家ノカキマツルモノヲ云クモシテハ儒者

ハ文章ノモノヨリ用テ机硯筆文珠帯架文匣ノ類々文の道也

具也武士ハ禮由目録モ刀ヲ矢太刀ノ類ハ武の道の具也

出家ハ念數拂子証鏡被の類ハ佛の具也大六鐮ハ金鍬

手斧テラノハ工匠の道の具也此外レコト准知レハ武士の詞也

道具ドウジト云ハ武器の類也武士のこざりハ其類ノ類也

具ツグト云ハ大子道具オホコドウジト云ハ外ソトハ知チト云

一 道具ドウジノ藤フキ合具カヒテハ紋カラム子コ座ザ字ジを名ケ也其類ノ草カラハ

草カラト云ハ其類ノ草カラト云ハ其類ノ草カラト云ハ其類ノ草カラト云

其類ノ草カラト云ハ其類ノ草カラト云ハ其類ノ草カラト云

付テ唐ノ字を用ス

一 出デ來キ合カヒの足アシ駄ダを名ケハ待マテの字也其類

其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ

其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ

其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ

其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ

其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ

其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ

其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ

其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ其類ノ物モノハ皆結ムスの字を付テ











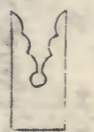
或説<sup>イシ</sup>猪の目乃形也と云ゆれども猪の目ハ似るるあり又

一説<sup>イシ</sup>平の目也西子の太指と大指人さし指と人さし指合せ

此の形をもるハ日輪<sup>ニチリン</sup>の印相<sup>インザウ</sup>見<sup>マリシテ</sup>摩利支天の平也云く用ハ

古人の物名付のハ後く迫きるを云へ名付のハ  
後世の人のハわづらひく御事理を云へ名付のハ

一はうの車小刀の柄墨の柄<sup>エスミ</sup>外の器もさうと云く金物をか

くも也を形<sup>カガミ</sup>  此也さのともいふさのともいふと云るを

畧<sup>リョウ</sup>しるも同也右のくを柄の形<sup>カガミ</sup>と云おのくを柄を同きたる

似<sup>ニ</sup>る故の名也應仁記ハ花御覧 寛正六年三月花頂若王子大原野ニテ東山殿花見ノ事ヲ云也

ノ結構ハ以百味百菓ツクリ御前ノ御相伴衆ノ筋<sup>ハシ</sup>ヲバ金

ヲ以テ展<sup>ノゲ</sup>之御供衆ノ筋<sup>ハシ</sup>ヲバ沈<sup>シジ</sup>ヲ以テ削<sup>ケツリ</sup>之金ヲ以テ逆鱗<sup>サカソノガキ</sup>ロラ

カク云く 岡本記ニ鞍ニ逆鱗ロラ入ルト云フ見タリ是ハ鞍橋ノ  
カモシノカハ 凡先ニサカロニクチヲ入ルヲ云古画ニ其跡見エタリ

一 羚羊皮<sup>カモシカ</sup>にて作りしるもとぬをかもと云く又<sup>シト子</sup>襦と云字の音ハ

にくとよむ也羚羊皮ハ襦<sup>ヨシノグ</sup>あるが羚羊の車をほくとも云也

拾遺和歌集雜の歌<sup>カモシカ</sup>云能<sup>ヨシノグ</sup>空<sup>カモシカ</sup>車<sup>カモシカ</sup>のかもをこひまつら<sup>カモシカ</sup>侍

りをもよ<sup>カモシカ</sup>侍<sup>カモシカ</sup>ずと<sup>カモシカ</sup>以<sup>カモシカ</sup>て侍<sup>カモシカ</sup>をれハ<sup>カモシカ</sup>後<sup>カモシカ</sup>京<sup>カモシカ</sup>仲<sup>カモシカ</sup>文<sup>カモシカ</sup>か<sup>カモシカ</sup>を<sup>カモシカ</sup>さ<sup>カモシカ</sup>て<sup>カモシカ</sup>馬<sup>カモシカ</sup>と

いふ人ありなれハ<sup>カモシカ</sup>かもを<sup>カモシカ</sup>を<sup>カモシカ</sup>と<sup>カモシカ</sup>お<sup>カモシカ</sup>も<sup>カモシカ</sup>あ<sup>カモシカ</sup>る<sup>カモシカ</sup>一<sup>カモシカ</sup>〇<sup>カモシカ</sup>う<sup>カモシカ</sup>一<sup>カモシカ</sup>能<sup>カモシカ</sup>空<sup>カモシカ</sup>な<sup>カモシカ</sup>く

といふをもむも<sup>カモシカ</sup>と<sup>カモシカ</sup>や<sup>カモシカ</sup>思<sup>カモシカ</sup>ん<sup>カモシカ</sup>志<sup>カモシカ</sup>の<sup>カモシカ</sup>や<sup>カモシカ</sup>も<sup>カモシカ</sup>も<sup>カモシカ</sup>い<sup>カモシカ</sup>か<sup>カモシカ</sup>も<sup>カモシカ</sup>ん<sup>カモシカ</sup>右<sup>カモシカ</sup>車<sup>カモシカ</sup>の

か<sup>カモシカ</sup>も<sup>カモシカ</sup>と<sup>カモシカ</sup>い<sup>カモシカ</sup>ふ<sup>カモシカ</sup>車<sup>カモシカ</sup>の<sup>カモシカ</sup>か<sup>カモシカ</sup>も<sup>カモシカ</sup>の<sup>カモシカ</sup>時<sup>カモシカ</sup>久<sup>カモシカ</sup>く<sup>カモシカ</sup>羚羊<sup>カモシカ</sup>皮<sup>カモシカ</sup>の<sup>カモシカ</sup>志<sup>カモシカ</sup>久<sup>カモシカ</sup>保<sup>カモシカ</sup>を<sup>カモシカ</sup>い<sup>カモシカ</sup>か<sup>カモシカ</sup>あり

漆塗<sup>ウレシスリ</sup>の鞍<sup>クラ</sup>子<sup>クラ</sup>箱<sup>クラ</sup>硯<sup>クラ</sup>策<sup>クラ</sup>糸<sup>クラ</sup>の類<sup>クラ</sup>の詩<sup>マキエ</sup>繪<sup>マキエ</sup>小<sup>マキエ</sup>平<sup>マキエ</sup>文<sup>マキエ</sup>といふも古書<sup>ハイモ</sup>不

見<sup>マキエ</sup>え<sup>マキエ</sup>る<sup>マキエ</sup>り<sup>マキエ</sup>是<sup>マキエ</sup>ハ<sup>マキエ</sup>言<sup>マキエ</sup>辭<sup>マキエ</sup>法<sup>マキエ</sup>ニ<sup>マキエ</sup>對<sup>マキエ</sup>して<sup>マキエ</sup>云<sup>マキエ</sup>詞<sup>マキエ</sup>也<sup>マキエ</sup>言<sup>マキエ</sup>辭<sup>マキエ</sup>法<sup>マキエ</sup>ハ<sup>マキエ</sup>法<sup>マキエ</sup>を<sup>マキエ</sup>云<sup>マキエ</sup>く

滋野井公飛御説  
以銀簿押文則平  
文也

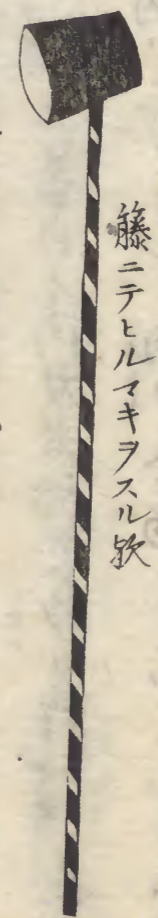






越後布ハ今ノ越後千々也水ヲ通サン為ニ此布ヲ用也水ヲ通ストハ  
 水ヲコス也塵ヲ去ル為也奥州後三年合戦ノ繪ニ義家朝臣  
 凱陣ニ馬ノク千ニ副テカ者ガ首丁頭巾ヲ  
 着テ柄長ヒサコヲ持タル射ヲエガケリ

柄長ヒサコ



籐ニテヒルマキラスル欵

一柄長抄ハ巾中を付テ薩戒記應永世二年九月十日ノ条今日  
 上皇御幸東山泉涌寺第中畧次下北面六人着布衣一人持柄抄  
 在御右方抄黒漆蒔繪菊八重有金物付御巾中巻付柄懸  
 肩持也一人御劔在御左方柄長柄ハ巾中を柄子結付  
 事ノ前九年合戦の繪も柄長抄ハ巾中を付テ袴を画  
 のきくろり馬花の如し

一京極宮諸大夫尾崎大和守

説云昔遠所行幸ノ時抄ヲ

持サレハ幸有ク年中行事

繪巻物ニモ抄ニ手巾

付テ辨見エタリ是ハ畢竟

浴巾水ニ用ラレシ物也

一蛭巻ハ長刀の柄鞭あどの形を籐を以テ

巻也蛭と云虫の巻付るもまたとて云之

久て巻つけくろりも蛭巻也蛭ハ細き虫あり細巻を蛭巻

と云根の蛭巻と云ハ根の輪を入る也又及るも糸もたき





其の形もやを交するも是ハ樺を卷と云也 是ハナリト云ハヨコガエ

筆葉 ヒナリキ あらゆる何り樺を卷と云 樺葉の形を

器物の飾は眼象と云 キアツ 何り三方四方の衝重 ツイカサ 此の穴を

眼象と云 穴三方何りを三方と云 四方何れをも穴を飾りあける

ハ眼象也 ハ眼象也ハの目あらざる眼象也

器の飾は牙像と云 ウツハ 何り机あら ツエ 脚 アシ 此は牙の如也

也 ケシヤウ 牙像と云 アシ 脚は限らず何れも是 周礼ノ考工記礼記

器物の飾は青瑣と云 セイサ 物あり車の腰衝倚子 ゴイシ 経机木の如也

あり 色青シ 此は彫 エリ 中を緑 ロクセウ 塗之 ヌル 古禁中 キヤウツクエ 也

瑣門あり門の扉は此物あり トヒラ 故 トヒラ 唐の天子も青瑣門あり

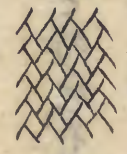


也博雅瑣連也前漢書元后傳注如淳曰門楣格再重如人

衣領再重裏者青名曰青瑣天子門制也師古曰青瑣者刺為

連瑣文而以青塗之也 韻會云凡物刻鏤貫結交加為連瑣

文者皆曰瑣非特門鏤 貞文按唐ノ青瑣ハ中ノ刺ミノ文

此方ニ云フ  アマスギア

一 シロナドノ 此のれがの多 形ト見ユ 三好亭は成記云茶湯有氷さ

火む シロナドノ 此のれが活た 形ト見ユ 又東山殿の飾記云 シロナドノ

茶碗の物 シロナドノ 此のれが 形ト見ユ 又或説は シロナドノ

別 シロナドノ 此のれが 形ト見ユ 又或説は シロナドノ

云 シロナドノ 此のれが 形ト見ユ 又或説は シロナドノ

赤置トハ則ち枝  
ノ事ニテタナニ  
紙ナドヲオク耐  
重シニ置ニハ夕  
十歩置トシルセ  
ユナリ



と何れも考れぬやうおきをわかれごとくありてちいさきごとくを

わかれごとくありて大よかるとごとくをわかれごとくありて

後よ葉多しんふきゴトクの間をカクレガのやとおきと云堂上りして

わかれを付たまの間をカクレガのやとおきと云其カクレガの間をわかれをあ

たため終ふゴトクをうけりたる物ゆへぬとおきのやをカクレガに

ぬとおきと云と云く堂上方よわかれの間に云るありて何れか

かと名付けしや

わかれを器してわかれ板と云あるべしわかれの板也

一わかれの物此より貞順を記しぬとの物よ誅あどにてゆへ横よ

置扇八十文字またては墨へしと云るやの物よ廣蓋のりん

一文箱古へハ惣梨子地すて一面は奇縁をりたる物ハ公方極用ハ

られし也移ハ惣恵めりすてやこのよ草木のりやあど

一本すきあしりたる也常照愚草

わかれすきあしりたる也可有斟酌すきあしり草木一本ありハ

わかれすきあしりたる也

わかれすきあしりたる也

わかれすきあしりたる也

わかれすきあしりたる也

わかれすきあしりたる也

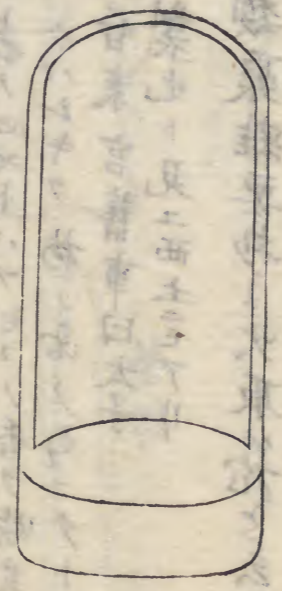
わかれすきあしりたる也



産訓往來云外  
 歩禰子金を提  
 等々  
 婚入記云ハンゾウ  
 トヒヤケノフ也云々  
 俗ニ小キタラヒラハン  
 ゴウト云ハアヤマリ  
 ナリ

齒ころこの箱は提一對のりか色一對と云ふは則ち  
 ろを入るべし何のりか色一對と云ふは則ち  
 くれと云をかあつらと云也五音お通也  
 おまごらを入る物の様を少作りみだるひのやうにたつ物  
 てみいふ則ち金杯のりか色一對と云ふはねをいせ一ツハ  
 けしを入る又提と云ふはさうのりか色一ツハひさげのめくつ物を作  
 ると物とは提と云ふをいせさうと云ふはさうと云ふは  
 一いつづれのりか色一ツハ色一ツハ記云は火神又いつづれと云ふ  
 こと炭を並くとあつらいつづれと云ふは今世の火取のりか色を云は火  
 取はかろかねえ提つるをいせ提つるある故といつると云

云は遊る可尋知也火取の圖を記す如し



火取ハ木ヲ作り  
 漆ぬりマエアル  
 シフタモ木ニテ作  
 リアコノ如クス  
 カシタル也キ香  
 穿トハ別也

一火取かろのり飯尾縮糸古布成記云涉火取 白き根を  
 作りたる火取もろ也これハはあひをいせ物也或は提又  
 ハ提あどちのりか色をいせ提用也この火取香提了  
 香あどたまそ人新よ出さぬること婚入修り見えり  
 一おきりきとハ灰をかか形今世の女髪具はどしどし  
 多似り織まろとハ柄を蘇も老るといふ産和日記











此はたふのさかたははよばよりかきけりしもの茶あごそのはよ  
かひおけはをむむとて永享九年十月廿日室町旅行幸記云常  
法和具足法文はさうしおまき志中よき入云々

一 硯箱又硯蓋のり古くハ硯箱は物を入て人よも贈り又おま入  
て人の茶も出しきりともぞゆより蓋のこ用るハたのこも也  
今の昔も硯蓋とてきか物もそのここの残るあるべし  
日記上巻今入とて出さる日つらてんるさうぞくひんごり  
ハりものあき物か硯箱よむとよりひま入てさう更級日記よ  
云云おんの命婦とてさあひたる事後々かやうたれめづし  
かりてよとてひは糸のをあうたること初めをききさし

一 硯のあきよ入ておせさう云々後拾遺集卷十五雜五後冷泉院の  
法時上東門院は法華阿んりりるをさうりてのあうらより  
硯の箱のりも茶の枝入をもとて給ひるゆへに下はつて  
よきさうりる暑云々信を然共一云和歌全は牙喜は三年三  
月内裏の物度出表文基用也硯蓋野行車時用楊宮  
云々大鑑共云此花山院ハ風流者よとておますすれは個  
度ともあとのけうらさこそ元もさすけりたれ六宮の絶入あり  
一 硯箱はさうりれりハ硯の箱見給ふべきうらふさ  
長足長あきさうりてさうせ給りてさうかざうりの茶の  
ありつる前縁のさあきさうりてさうせ給りてさうかざうりの茶の



一 鏡箱カバンの事倍々かその室也イェ後撰集卷十九離別遠き因り  
 備りける人旅の具つらうけの鏡箱のうらうきあけつ  
 こころおちおちのけりすし身をつらうきあけつ  
 こころかけはうきを思ふとく

一 鏡ツラモヤツの表模様の事伊勢集云鏡のうらうきつねのうきをみつ  
 まづうきれはかとせよなまのうらうき浦すむあづのうきを  
 見ゆらうけや源信明集云鏡うらうきまを志きの志きふ  
 かきつおとこ一あまをれはうきをうらうきあみうき面け  
 のう人のうきを志きとハ志きの  
 包あま

一 混布コブの事永享室町殿行幸記云清湯殿の上まき

置中混布箱蒔繪とありは混布の事何は用ひ物也

未考追て可尋

一 金鞭カナムチ又ハ鉄鞭の事走衆故實云引をさう太刀をさき金鞭を

取りあはさけて糸也中暑走衆さざれたり付ハとて土小  
 つきそ休へカナフチを杖に法興かきのからめの時のもて志きれハ

志きれあはぬ箱の志きれらうらうき柄の先は木を志きの  
 もも又金を入ると云長さ八人の志きれあはぬ箱は柄を柄の  
 まき木を角をも又如金を入ると云

貞丈雜記卷之八終

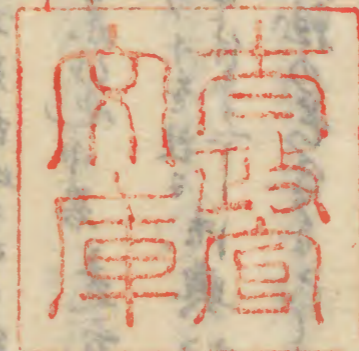


發行書林

大坂

江戸

板元	和須岡和和岡	須原	岡田	須原	山城	須原	河内	河内
丁子屋	泉屋	原屋	泉屋	原屋	城屋	原屋	内屋	内屋
平兵衛	金右衛門	伊庄	善兵衛	嘉七	新大	佐茂	茂兵衛	喜兵衛



伊勢平藏貞丈著

大傳馬町三丁目  
丁子屋平兵衛



